

東北南部における縄文時代終末から弥生時代初頭の遺物組成

植松暁彦

1 はじめに

近年、発掘調査の増加に伴い、山形県でも縄文時代晩期の「捨て場」と称される遺物廃棄場がいくつか確認されている。同晩期は、青森県の亀ヶ岡遺跡に代表される磨消縄文など多様な文様や器形（浅鉢や皿、注口土器など）の土器群や遮光器土偶などが知られ、亀ヶ岡文化と称される縄文時代終末の精巧な文化が東北一円に盛行した時期として知られている。

しかし、実際の発掘調査では、土器の地文が縄文のみで構成され、粗雑な造作の所謂粗製土器（深鉢や鉢など）が一定量あることが知られており、他県ではこれら粗製土器も含めた全体的な遺物の組成や形態の変化から、当該期の土器製作や社会変化の実体に迫ろうとする研究も行われている（藤村 1983・須藤 1995）。

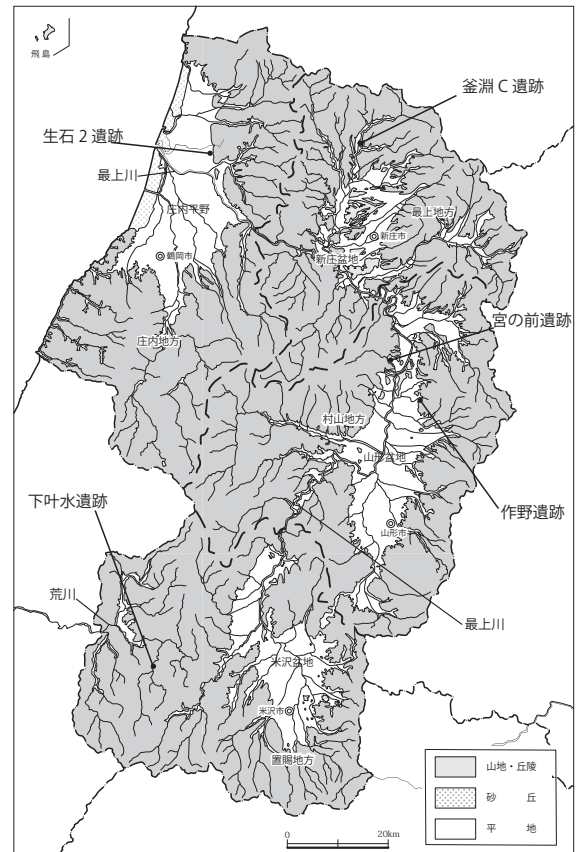
筆者も県内の村山市宮の前遺跡第3次調査（植松 1999）、小国町下叶水遺跡（植松 2009）、村山市作野遺跡第2・3次調査（植松 2011・2012）などで、縄文時代後期末～晩期の捨て場などを調査する機会を得て、多量の土器や石器などの遺物の組成を、層位やブロック毎に整理したことがある。

本稿では、縄文時代の狩猟採集から「米どころ山形」の始まりである弥生時代の稲作開始への変移や地域の様相を探るため、上記遺跡と同時期や後続する弥生時代初頭の遺跡を再整理し、報告書刊行後の新たな知見なども加え、縄文時代終末から弥生時代初頭に至る変革期の遺物組成の特徴などを概括したい。

2 研究史と編年観

縄文時代の遺物組成は、東北地方北部において多様な器種や形態が認められる縄文時代後晩期の遺跡などで、研究が進められた経緯がある。これは、縄文時代終末から弥生時代にかけての変換期に関わることもとも絡み、縄文・弥生時代研究者双方からのアプローチがあった。

近年では、特に岩手県九年橋遺跡で、藤村東男氏が土



第1図 遺跡位置図

器について「徹底して復元」した結果を基に、詳細な土器組成について成果を上げている（藤村 1983）。

また、青森県や岩手県などの縄文時代から弥生時代にかけての遺跡の土器組成を整理し、その利点と弱点について整理された（藤村 1983）。

東北大学の須藤隆氏は、宮城県や岩手県の資料（中沢目貝塚・山王遺跡など）を精査し、縄文時代から弥生時代にかけての土器組成の変化などを整理し、大きな時代変化を土器組成の中に求めようとした（須藤 1995）。他に、宮城県の田柄貝塚（藤沼 1986）や摺萩遺跡（柳沢 1990）などで同様に一部土器組成を整理している。

但し、これらの研究には、数値化にあたり、求める情報の相違もあって各々大きな違いがあった。藤村氏は、「徹底した復元」により、遺跡内での土器の実数（個数）やその組成の実体に迫ろうとした。一方、須藤氏は、遺跡出土の精密な全点計測により、遺物組成を追求したた

め、全体に大型で復元が難しい深鉢などの点数がより多く組成される結果になった（第22～24図）。

本県では、多量の遺物が出土した調査例はあったが、明確な捨て場があまりなかった点や、復元時の制約もあり、遺物組成はあまり行われてこなかった。

但し、遺物組成の数量化を検討した遺跡もいくつか散見される。土器では、縄文時代後晩期を主体とした鶴岡市（旧朝日村）砂川A遺跡（佐藤1984）で、破片資料も含む全点計測で器種毎の数量化をはかった。

石器では、砂川A遺跡で数量化をはかっているほか、遊佐町吹浦遺跡（前期）、南陽市月ノ木B遺跡（早期）などで、石材も含めた組成を行っており（渋谷1989）、県内の縄文時代の石器組成の一端を知ることができる。

近年、筆者も宮の前遺跡の遺物組成を層位毎に概略を報告し、報告書表などから詳細を再整理した（植松1999）。他に下叶水遺跡や作野遺跡の報告でも捨て場などの層位毎に遺物組成や法量分布、赤彩・補修孔、炭付着の数量化を行い、集落内や地域毎の時期による変遷を指摘した（植松2009・2011）。

なお当該期の編年観は、上記報告書でも基準にした東北部の土器型式などを採用し、古い順に縄文時代後期後葉は小林圭一氏の所謂「瘤付土器」（高柳1988）の各段階（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）の時期、後続の同晩期は山内清男氏の「大洞式」（山内1964・1979）の各型式（B・B C・C 1・C 2・A・A'式）の時期、弥生時代初頭は、筆者の大洞A'式の一部に弥生時代が含まれるものとし、須藤隆氏の「青木畑式」期などを援用する。

3 当該期の遺跡と概要

本稿では、縄文時代終末～弥生時代初頭の遺物組成検討のため、近年多量の遺物が出土し、ある程度まとまり

のある出土状況と判断される下記5遺跡6地点を取り上げる。

- ①宮の前遺跡 SG（縄文時代後期後葉～晩期後葉）
- ②下叶水遺跡 SG・包含層（同後期後葉～晩期後葉）
- ③作野遺跡 3次 SG（同晩期中葉～後葉）
- ④釜淵C遺跡 C区包含層（同晩期中葉～後葉）
- ⑤作野遺跡 2次 ST40（同晩期後葉～弥生初頭）
- ⑥生石2遺跡 C区包含層（弥生時代初頭）

上記遺跡（以下、遺跡を省略）は、①～③は報告書でも遺物組成をまとめており、④～⑥は報告書で総体的な遺物組成に言及していないが、後述する遺物量や一括性のある出土状況から筆者が判断し、報告書の遺物図や表から器形の特徴が分かる完形品を抽出し資料化した。年代的には、①から⑥にかけて時代が新しくなり、時期的な器種組成の増減などが推定できる。また、地域的には、①・③・⑤が最上川中流域、④が同中～下流域、⑥が同下流域、②のみが最上川以外の荒川流域の小国盆地に所在し、地域毎の特徴も推測できよう（第1・2図）。なお、①・②・③・⑤の整理作業では、九年橋遺跡と同様に「徹底的に復元」を行い、口径や器高などが判断できる1個体資料として認識できるもの（残存率1/6以上。宮の前3次は1/4以上）を抽出した。

以下に各遺跡の特徴や捨て場などを列記する。

①宮の前遺跡 3次 SG（第3・4図：植松1999）

第3次調査は、道路改築事業に伴い行われた。捨て場は、調査区中央で、第2次調査で確認された第3捨て場の延長部と考えられ、東南方向に発見された。

この捨て場は、旧河川跡が捨て場として機能しながら徐々に埋没し凹地になり、洪水砂層（Ⅳ－1・3・4'）を含む間層を複数挟み、最終的に調査区をほぼ覆う包含層（Ⅳ－3層・Ⅲ層）的な状況が看取された。最深部で

第2図 近年の縄文時代末葉～弥生時代初頭の遺物捨て場

遺跡名	次数・地区	市町村	流域	標高(m)	調査面積(m ²)	遺物捨て場*2		大別層準	層準	出土箱数	時期(縄文時代)	年代観	報告書	備考
						遺構名	面積(m ²) 下:長・幅							
宮の前	3次	村山市(山形北部)	最上川中流	125	1320	SG谷跡	320(20×16)	1.2	3層	Ⅲ・Ⅳ-1～5	540	後期後葉～晩期後葉	瘤付Ⅰ～大洞A	セ65集(植松1999) 主体は晩期中葉～後葉
下叶水		小国町(米沢西部)	荒川上流	262	5900	SG1河川跡	375(25×15)	0.6	3層	Ⅳ・F1～3	600	後期後葉～晩期後葉	瘤付Ⅰ～大洞A	セ177集(植松2009) 主体は後期後葉
作野	3次	村山市(山形北部)	最上川中流	134	250	SG1河川跡	64(8×8)	1.5	3層	F1～4	60	晩期中葉～同後葉	大洞C2～大洞A	セ205集(植松2012) 主体は晩期中葉
釜淵C	C区	新庄市(新庄盆地)	最上川中下流	125	1150	包含層	168(28×6)	2	4層	Ⅰ・Ⅱ・Ⅱa・b	570	晩期中葉～同後葉	大洞C1～大洞A	セ115集(黒坂2003) 出土地点毎に時期的まとまり
作野	2次	村山市(山形北部)	最上川中流	126	1400	ST40堅住	12.5(5×2.5)	0.5	1層	F1～2	65	晩期後葉～弥生初頭	大洞A'～青木畑	セ205集(植松2011) 覆土・床面の一括資料
生石2	C区	酒田市(庄内北部)	最上川下流	11	117	包含層	117(13×9)	0.15	1層	V層	約200個	弥生初頭	青木畑	県117集(安部1987) E区でも弥生出土(後期含む)

* 1: 山形北部は山形盆地北部、米沢西部は米沢盆地西部、庄内北部は庄内平野北部を表す。

* 2: 遺物捨て場の面積などは筆者が報文や平面図などから抽出、判断した。

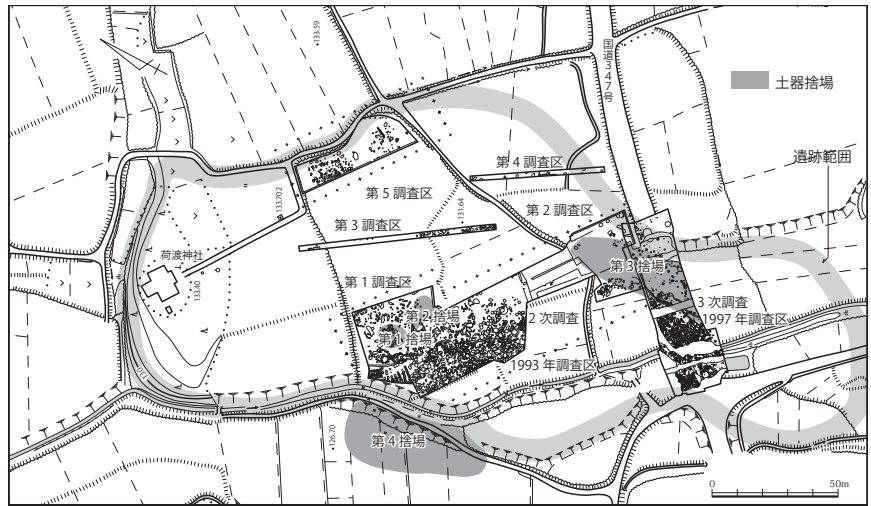
約 1.5m を測り、概ね 5 層に大別される。遺物は、洪水砂層以外を主に多量の土器、石器のほか、土偶・石棒などの祭祀具、ヒスイ製の勾玉、耳栓、化石を利用した装身具などが出土した。なお、遺物の一部には、ほぼ完形品で廃棄され、土圧によりそのまま圧壊したような出土状況のものも認められた。整理作業では総個体点数約 286 点とした。

②下叶水遺跡（第 5・6 図：植松 2009）

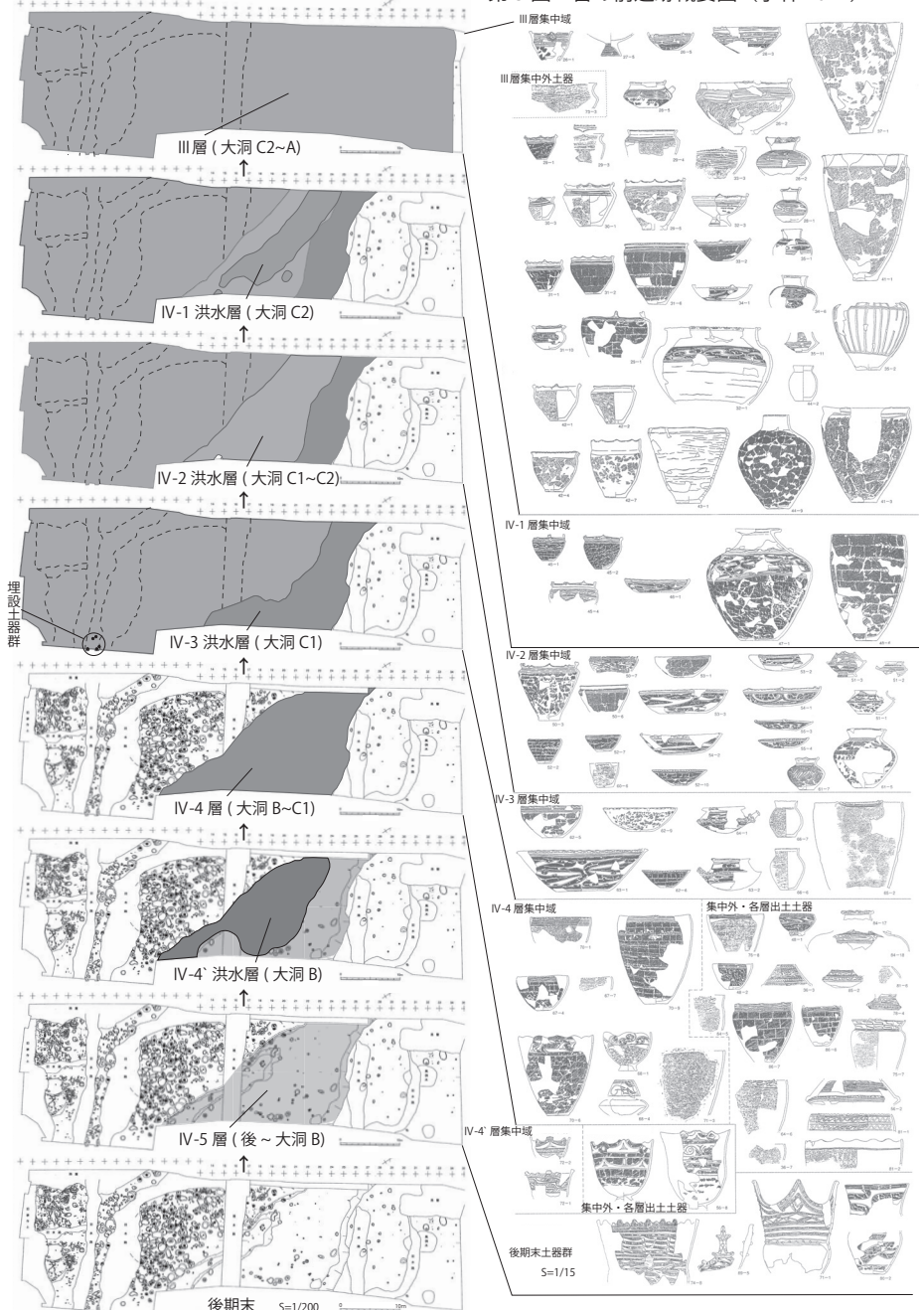
横川ダム工事に伴い調査された。捨て場は、旧河川跡の上層を利用し、遺物が出土する最深部で約 1.5m を測り、概ね 3 層に大別される。遺物は多量の土器、石器のほか、土偶・石棒などの祭祀具、ヒスイ製の勾玉などの装身具が出土した。

調査区は下叶水集落と重なり、調査区西半部などは攪乱や包含層の掘削が著しかったが、旧河川や東側の包含層（IV 層）は概ね良好な遺存状況であった。そのため、埋設土器が出土した包含層を含め、その下位の河川跡も層位毎に発掘調査を行った。

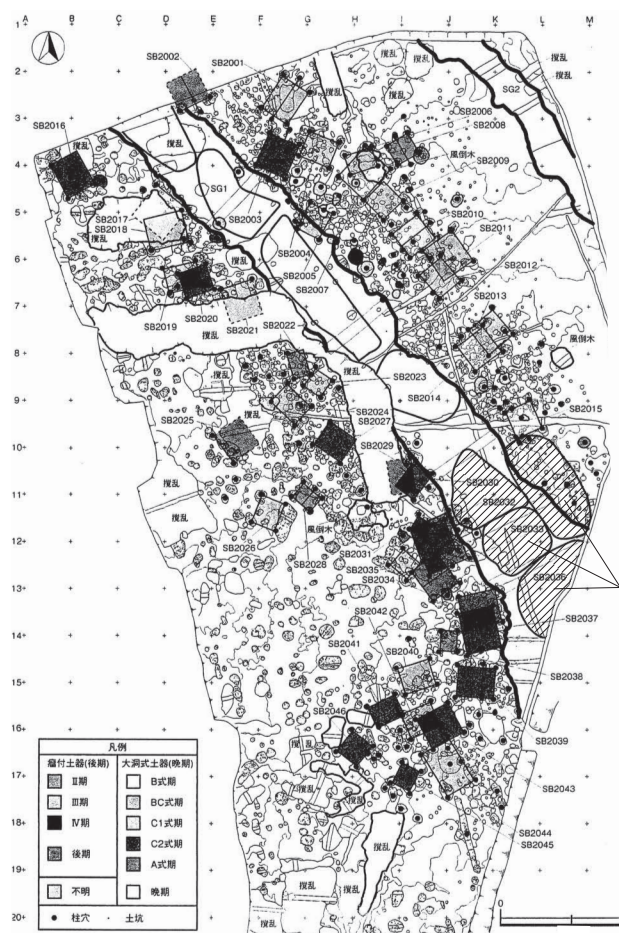
その結果、旧河川跡が捨て場として機能しながら徐々に埋没し凹地になり、包含層（IV 層）が最終的に調査区をほぼ覆う状況が看取された。特に旧河川には、遺物が集中して出土する「集中ブロック」が複数形成され、時期毎の建物群の分布と相関関係があることも分かった。



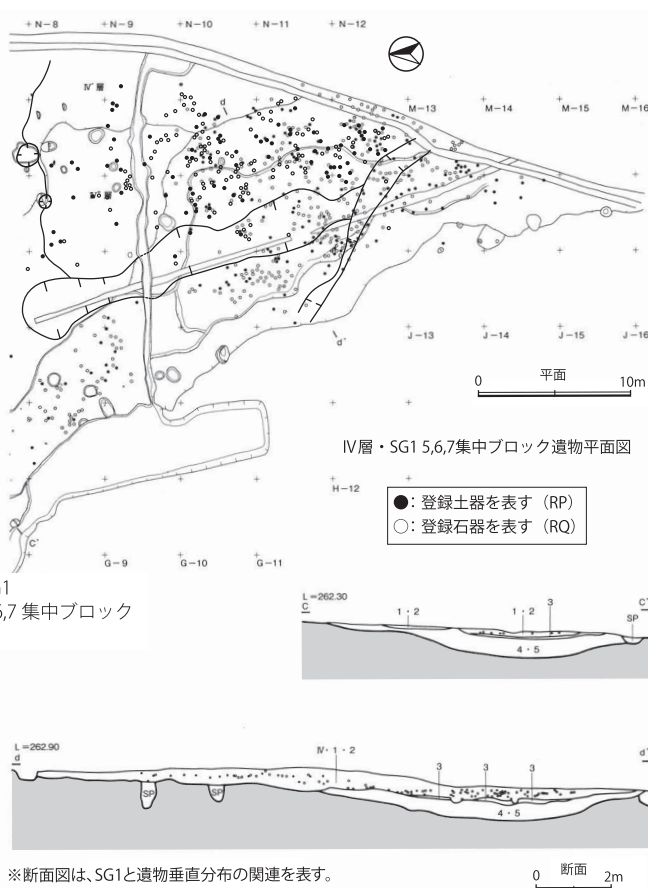
第 3 図 宮の前遺跡概要図（小林 2011）



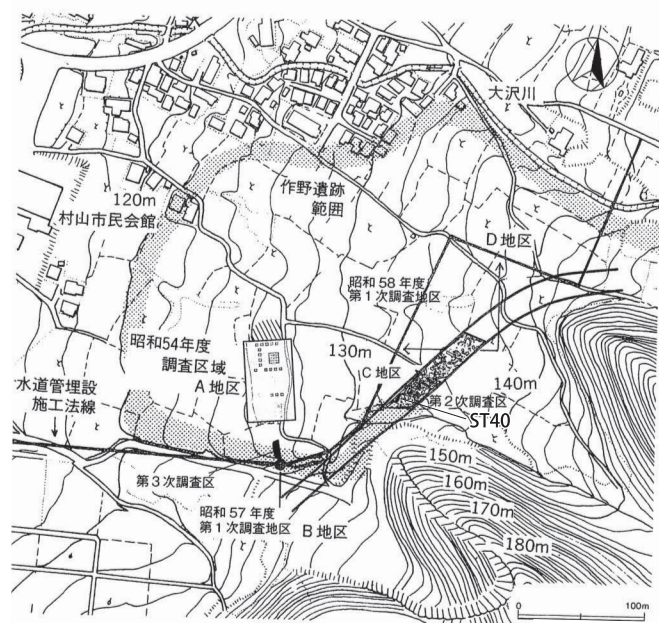
第 4 図 宮の前遺跡捨て場平面図と土層断面（植松 2007）



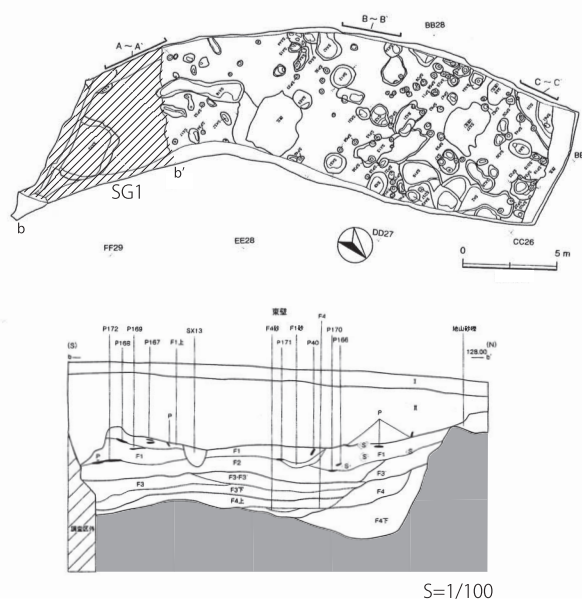
第5图 下叶水遺跡概要図(植松 2009)



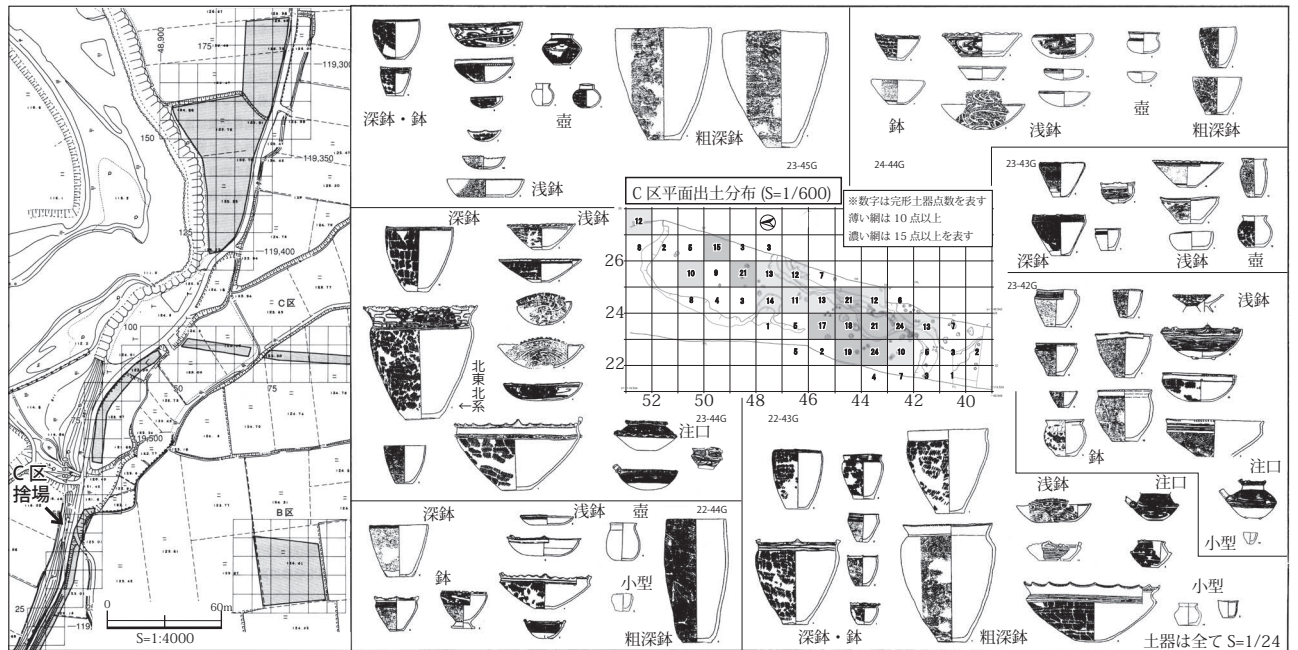
第6図 下葉水捨て場平面図Ⅳ層・SG15~7ブロックと土層断面
(植松2009合成)



第7図 作野遺跡概要図(植松 2012)



第8図 作野遺跡3次調査SG1捨て場平面図と土層断面図
(植松 2012)



第9図 釜淵C遺跡概要図・平面分布と主な土器（黒坂 2003 に筆者加筆・改変）

なお、調査区南東の5～7集中ブロックは、特に遺物が集中し、ブロック毎の境界も不明瞭なほどであった。また、時期幅はややあるが、完形や半完形品なども多く、まとまりのある資料と考えられた。その上位には包含層IV層が堆積し、新相の遺物が出土する。整理作業により総個体点数 251 点を数えた。

③作野遺跡 3 次 SG1（第 7・8 図：植松 2012）

第3次調査は、2011年に市道路事業に伴い行われた。その結果、小規模ながら第1次調査で確認された河川跡の「捨て場」の北岸と推測される部分（幅約 8m × 長さ約 8m）が発見された。この捨て場は、最深部で約 1.5m を測り、概ね 5 層に大別される。遺物は、中～下層を主に多量の土器、石器のほか、土偶・石棒などの祭祀具、ヒスイ製の勾玉といった装身具が出土した。

捨て場となる河川は丘陵のある東から西に流れ、下位は洪水砂層などが堆積しており、その後捨て場として機能しながら徐々に埋没し凹地になり、最終的には埋設土器などが設置された墓域になるようである。なお、捨て場の中心的中～下層の遺物の一部は、ほぼ完形品で、土圧により圧壊したような出土状況も認められた。整理作業では総個体点数 177 点であった。

④釜淵C遺跡C区包含層（第9図：黒坂 2003）

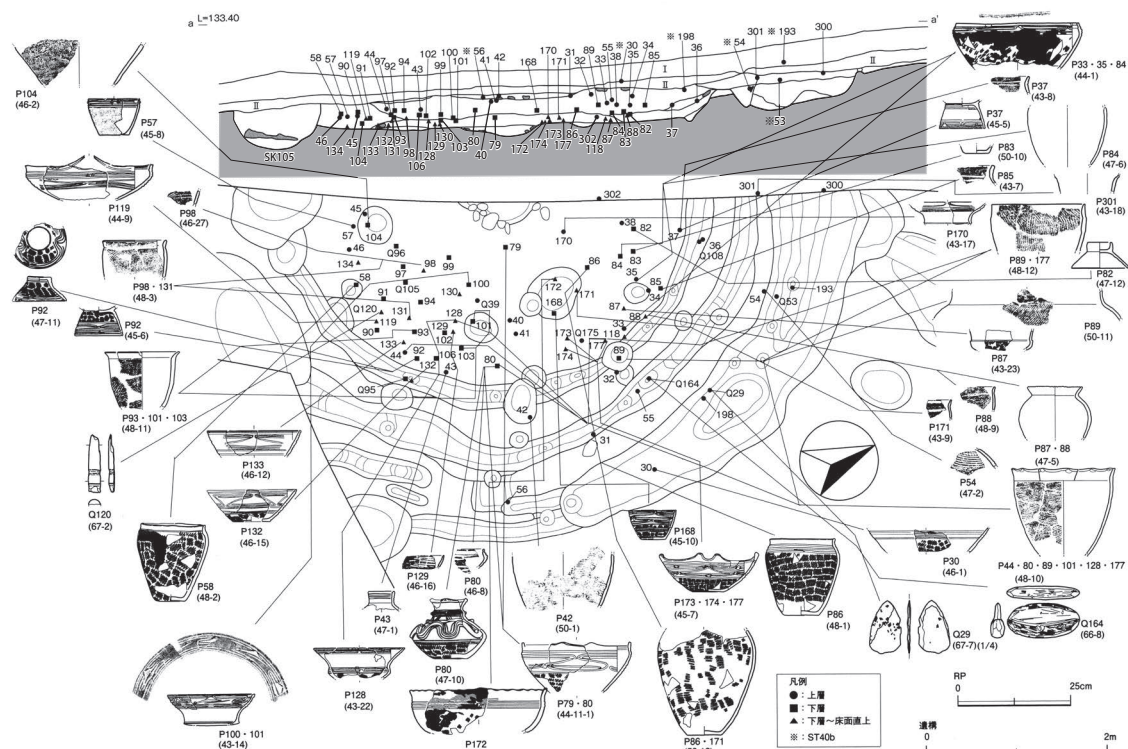
圃場整備事業に伴い調査された。縄文時代中期の遺構もあるが、遺跡南側のトレンチ調査（B・C区）で多量の遺物が出土し、報文では包含層とする。特にC区北

端部の一角（7 グリッド分）では、落込み状地形の上で、概ね 4 層（Ⅰ・Ⅱ・Ⅱ a・Ⅱ b）に大別される、遺物が多量に包含される層（包含層）が深さ約 2m で堆積し、報文で「層位的よりも平面分布で时期的なまとまりがある」とされた。土器や石器、土偶などの祭祀具が出土した。

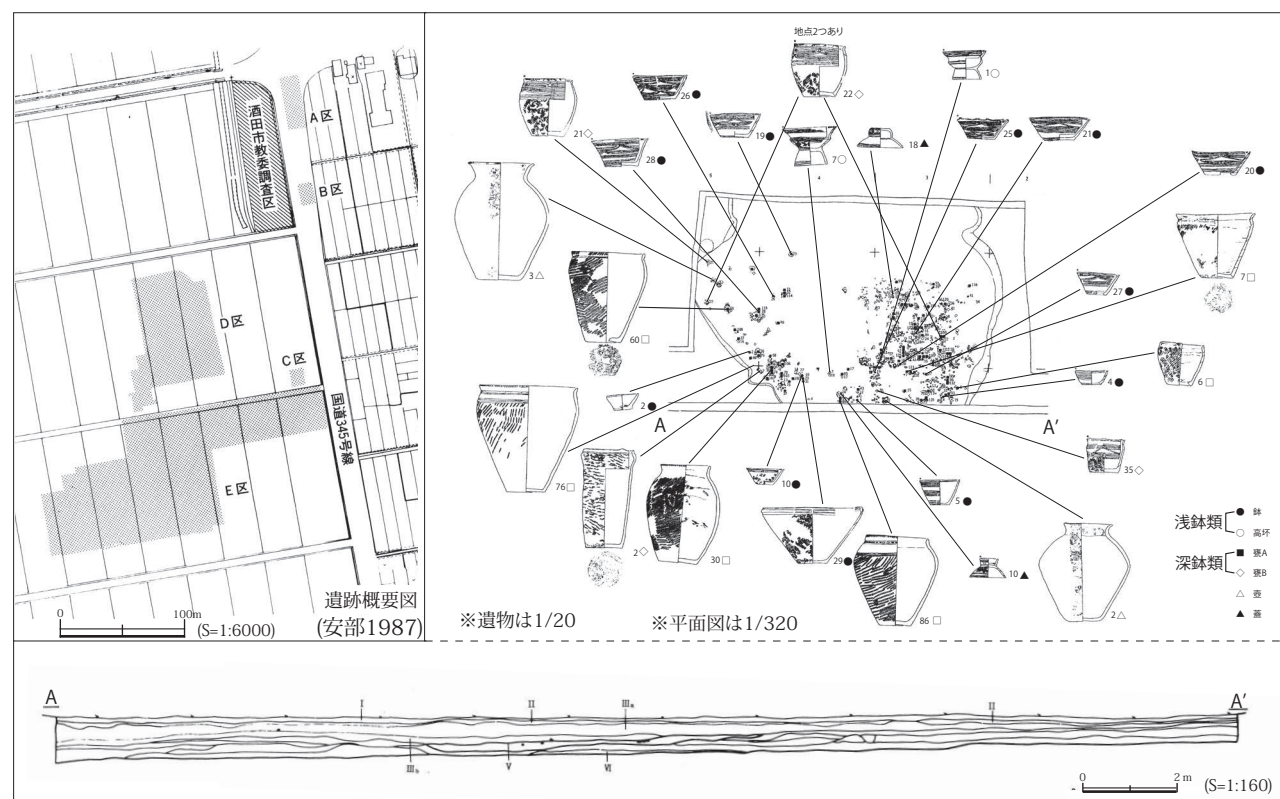
調査では、C区中央部で遺物が集中して出土し、特に前述 7 グリッド分（22～24－42～44G）では、完形品がグリッド単位（2m 四方）で 15 個以上確認される範囲がある（第9図濃網部）。報文でも一定幅（大洞 C1～A 式）はあるが、「晩期中～後葉のまとまり」が指摘される。整理では時間の制約もあったが、少なくとも有文のものはほぼ復元し実測した（黒坂雅人氏のご教示による）。なお、石器の石材や出土量も本文中で提示するが、個別は不明である。本稿では筆者も全てを実見しておらず、全体の組成など詳細は別稿に譲り、これまで不明であった土器完形品の法量分布などの検討に留める。上記 7 グリッド分の完形資料は約 144 点ある。

⑤作野遺跡 2 次 ST40（第 10 図：植松 2011）

作野遺跡の第2次調査は道路事業に伴い行われた。その結果、直径約 5m の円形の竪穴住居跡が 1 棟確認され、床面からは弥生時代初頭（青木畑式期）、堆積土からは縄文時代末期（大洞 A' 式期）～弥生時代初頭（青木畑式期）の土器や石器が多く出土した。この竪穴住居跡は、2 時期の変遷が判断され、最深部で約 0.5m を測り、概ね 3 層に大別される。遺物は、中～下層を主に



第 10 図 作野遺跡 2 次調査 ST40 平面図と土層断面 (植松 2011)



第 11 図 生石 2 遺跡概要図・同 C 区平断面図と主な登録完形土器 (安部 1987 に筆者加筆・改変)

多量の土器、石器のほか、土偶・石棒・石冠・石製品などの祭祀具が出土した。

これらの土器の一部は遺存状況がよく、床面資料の時期から、大半は周囲の流れ込みと考えられるが、晩期末（大洞 A' 式期）～弥生時代初頭（青木畑式期）にかけて一定のまとまりのある一括性のある資料と判断された。

なお、弥生時代には、甕・高坏などが新器種として登場するのが一般的だが、作野 2 次報文では、同時期の山形市北柳 1 遺跡（小林 1997）で示されたように、「（本県内陸部では）甕と深鉢の区分は厳密ではなく」、また「縄文土器からの系譜を引く」段階であることから、器種名称を深鉢・浅鉢とした。後述する生石 2 遺跡でも同様の理由から本稿では同じ名称を用いた。整理では総点数 39 点（残存率 1/6 以上）が確認された。

⑥生石 2 遺跡（第 11 図：安部 1987）

調査は、圃場整備事業に伴い、県教育委員会が行った。C・E 区などの古代遺構面の下層から弥生時代の文化層が確認された。ここからは炭化米など稲作の痕跡が確認された。C 区は弥生と古代との間に間層を挟み、遺構は検出するに至っていないが、「径 6～8m の中央部が若干盛り上がる落ち込んだ範囲に、弥生土器が 200 個体以上集中して出土」し、「土器は各個体がまとまりを持ち、投棄されたような出土状況」を示し、「遺物層が単一」であることから「一括遺物」として扱われている。

報文では、C・E 区全体で土器は器種 6 種からなり、器種の組成は実測したもので下記の通りである。器種は、鉢 91 点（約 16%）・C 区破片 92 点（18%）、高坏 33 点（約 6%）・同破片 21 点（4%）、甕 A243 点（約 43%）・同破片 331 点（65%）、甕 B（＝深鉢）63 点（12%）・同破片甕に含む、壺 97 点（約 17%）・C 同破片 54 点（10%）、蓋 32 点（約 6%）・同破片 14 点（3%＊）の器種組成割合で、「C 区・E 区各個別の破片を含めた総出土数量から見た場合も、同様な組成率を示している」とする（＊蓋は口縁部と底部を口縁部の個体数としたため重複数である）。

なお、E 区では、弥生後期の天王山式の混在などもあり、本稿では C 区資料を主に取り扱う。また、本稿で後述する器種を縄文時代からの系譜を留意して勘案すれば、鉢・高坏が浅鉢類（22%）、甕 A・B が深鉢類（65%）、

壺 10%、蓋 3%となる。

4 遺物組成の整理と概要

本章では、前章であげた遺跡で、土偶や石棒などの祭祀具、勾玉などの装飾品を除き、遺物の大半を占める土器と石器を分けて、組成を整理する。特に土器は、各遺跡の報告書で時期を大別しており、それを援用する。その結果、時期は古い順に以下の段階に分けられる（なお、以下は「遺跡」・「SG」、瘤付土器の「段階」、大洞型式の「式」を省略。第 14 図など参照）。

- I 期：縄文時代後期後葉（下叶水下層 [瘤付 I ～Ⅲ]）
- Ⅱ期：同後期末葉～晩期中葉（下叶水中層 [瘤付Ⅲ～大洞 C 1]、宮の前 3 次下層 [瘤付Ⅲ～大洞 C 1]）
- Ⅲ期：同晩期中葉（宮の前 3 次中層 [大洞 C 1 ～ C 2]）
- Ⅳ期：同晩期中葉～後葉（下叶水上層 [大洞 C 1 ～ A] 宮の前 3 次上層 [同 C 2 ～ A]、作野 3 次 [同 C 2 ～ A]、釜淵 C－C 区 [同 C 1 ～ A]）
- V 期：晩期後葉～弥生時代初頭（作野 2 次 ST40 [大洞 A' ～青木畑]、生石 2－C 区 [青木畑]）

以後、この大別 I ～V 期の段階で、組成や変遷などを比較し、報告書刊行後の新たな知見も加えて概略を記す。

A 土器

土器は、①～③の報告書で、口径と器高の比率などから器種毎に大別（器種分類）し、深鉢、鉢、浅鉢（皿含む）、壺、注口土器、小型土器（ミニチュア土器含む）、蓋、の 7 種類などに分類した（第 12 ～ 14 図）。

更に大半の器種を器形毎に細分した（器形分類）。他に土器の施文文様や成形技法などから、特に晩期に特徴

第 12 図 縄文時代終末の土器分類図（器種・器形・文様）：（植松 1999 より）

器種分類		器形分類	
深鉢	器高>口径	I 類	胴部等が括れ、口縁部外傾
鉢	器高(口径の1/2以上)<口径	Ⅱ類	胴部が口縁部に至り、直立・内湾
		Ⅲ類	口縁部が屈曲し、外傾・外反
浅鉢	器高(口径の1/2未満)<口径	I 類	底部から湾曲して立ち上がる
＊皿も含む		Ⅱ類	底部から直線的に立ち上がる
壺	最大径の2/3<頸部	I 類	口縁突起、装飾等付す広口壺
		Ⅱ類	口縁突起、装飾等付す細口壺
		Ⅲ類	口縁部が単純に立ち上がる壺
注口土器		I 類	頸部の傾きのまま口縁部に至る
		Ⅱ類	頸部の上に受皿状に口縁がつく
香炉土器			
小型土器	＊多孔土器含む		

文様分類	
後期	後期後葉の入組文、貼瘤の土器群。細別Ⅳ段階(瘤付土器Ⅰ～Ⅳ期)
1類	三叉文、入組文、沈線文による区画文(大洞B式期)
2類	羊歯状文、曲線的な入組文、渦文(大洞BC式期)
3類	羊歯状文の簡略化、珠文状文様、曲線的な雲形文(大洞C1式期)
4類	珠文状文様の列点化、多重平行沈線、雲形文の簡略化(大洞C2式期)
5類	1～3条の平行沈線、口縁部等から4類とは区別
6類	工字文を主体(大洞A式期)
7類	無文で、丁寧なミガキ、朱等を施す
8類	地文や無文のみ、所謂粗製土器



的な精製品の文様（有文）と、地文のみの文様（8類）に分類した（文様分類）。

本稿でも概ねこれに準じ、第12図にまとめた。なお、一部浅鉢は、報告書によって分類が異なっていたことから、第12図の浅鉢Ⅰ類は作野3次Ⅲ類・作野2次ST40 B類、同Ⅱ類は作野3次Ⅰ類・作野2次ST40 C類に対応する。

なお、作野2次ST40、生石2の遺物は、数量は限定的だが一括性があり、時期変遷などの特徴を得るため同様の分類を行った。具体的には、変形工字文（同A'式期）や波状文（青木畑式期）などが縄文時代最終末（大洞A'式期）～弥生時代初頭（青木畑式期）に特徴的な文様として、各報告書に基づき、概ね上記時期に対応させた。また、前述②作野2次で述べた一部器種の集約（浅鉢類・深鉢類）、新たな器形の浅鉢類Ⅳ類（底部丸底で口縁部外反）や深鉢類Ⅳ類（寸胴形で同上部が膨らむ）を加え、先の文様分類などから精粗も判断した（第15図註）。

本稿では、大きく器種と器形、精粗の比較を注視する。他に、土器の精粗などを検討する上で、赤彩顔料の土器、

補修孔を有する土器、器種毎の法量分布、縄文原体の分類や組成比率なども比較し、所見などを記した。

B 石器

遺跡の各層位毎では、数量が限られるため、各報告書に準じた遺跡毎（主体時期）の比較を試みた。具体的には、一般的な定形石器や礫石器を器種分類し、加工痕のある石器なども含め数量的な組成を比較する。また、器種毎の石材やアスファルト付着もまとめた。

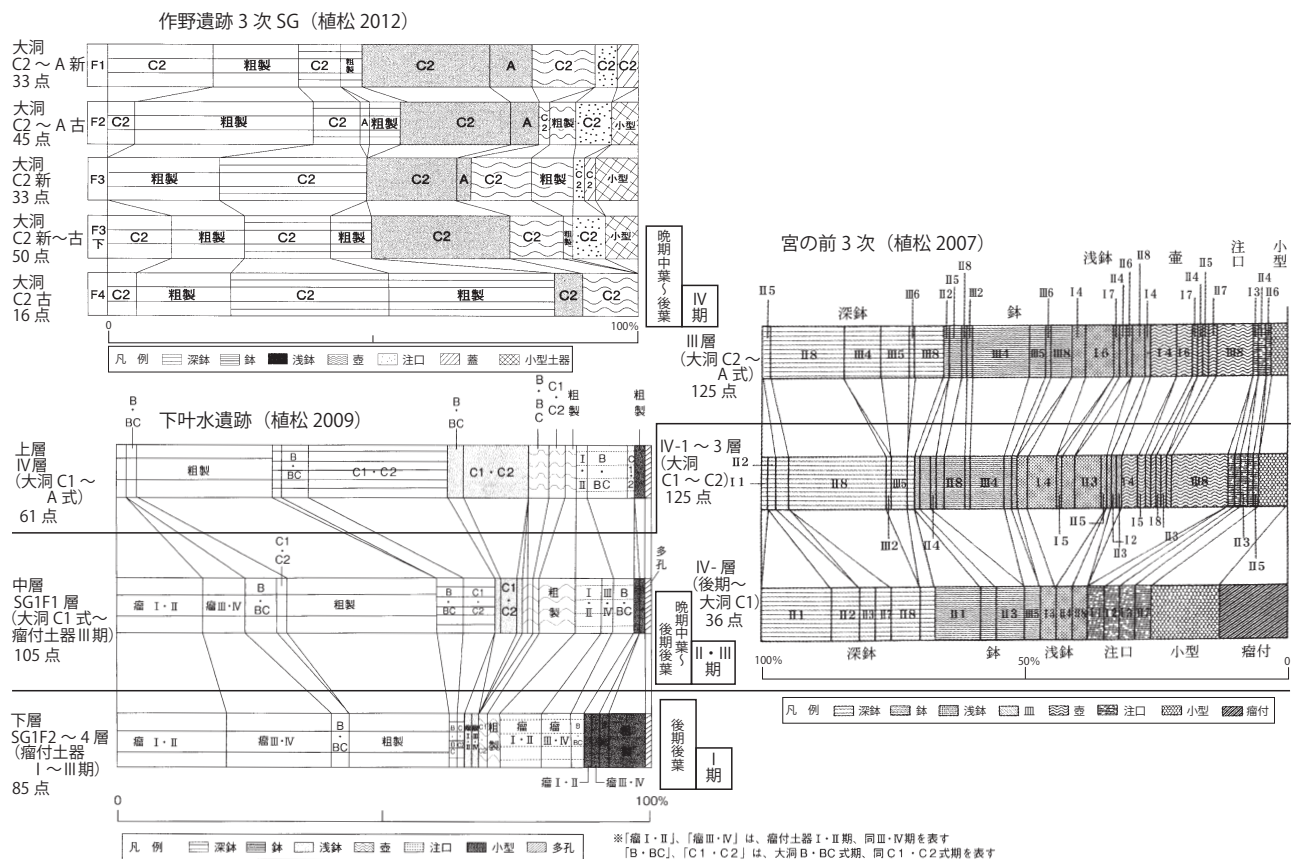
5 出土遺物の組成比率の比較から

本章では、前述で示した時期や分類などに基づき、各期毎に、遺物の器種組成などを具体的に検討していく。

A-1 土器 器種・器形組成・精粗（第15図）

Ⅰ期：縄文時代後期後葉（瘤付Ⅰ～Ⅲ）

当該期の最も古相資料では、下叶水層（瘤付Ⅰ～Ⅲ）をあげる。器種では深鉢が全体の60%以上あり、組成の2/3を占め最も割合が高く、精製（有文）が約40%と多く、粗製は約20%と少ない。その他では、注口土器、小型土器が10%以上で一定量認められる。注口土器は有文の精製品が多く、小型土器は粗製品が多い。他に鉢・



第14図 縄文時代終末期の土器器種組成図（植松 2007, 2009, 2012 を合成）

壺などが5%以下で散見されるほどである。

器形では、深鉢の器形では、精製（有文）では胴部が括れるⅠ類が15%、括れないⅡ類が10%以下で、比率は約半々ながらⅠ類が多い。それに比べ粗製深鉢の器形は、Ⅱ類が大半で器形が限定的である。なお、注口土器は全体に口縁部に受け部をもたないⅠ類である。

Ⅱ期：同後期末葉～同晩期中葉（瘤付Ⅲ～大洞C1）

下叶水中層（瘤付Ⅲ～大洞C1）を主に、宮の前3次下層（瘤付Ⅲ～大洞C1）は総点数が少なく判然としないが、補完資料として傾向をみる。

器種では、深鉢がⅠ期と同じ全体の約60%近くだが（宮の前約35%）、下叶水では後期約20%に減少、晩期約10%、粗製約30%と増加する。鉢は約10%（宮の前約20%）に増加し、精製品が主である。両遺跡とも深鉢と鉢で全体の50～60%（約1/2）を占める。

Ⅰ期に一定量あった注口土器は当期でも約10%（後期7%・晩期3%）存在し、同様に当期から晩期の壺類も10%以上に増加（宮の前0%）、浅鉢も5%（宮の前10%）散見される。Ⅰ期に一定量あった小型土器は5%以下（宮の前約10%）だが当期も存続する。

器形では、最も多い深鉢は胴部が括れる後期Ⅰ類が5%前後（宮の前10%）、括れないⅡ類がⅠ期と同じく5%以下（宮の前25%）に減少するが、宮の前遺跡ではⅡ類が増加傾向にある。粗製深鉢は約30%（宮の前約10%）組成し、下叶水ではⅠ期と同等で、両遺跡ともⅠ期と同じⅡ類が大半である。鉢類は全体に晩期精製が主体で、Ⅱ類が10%以上（宮の前約5%）に増加し、口縁部が屈曲するⅢ類が5%以下だが出現し始める。

浅鉢は、Ⅰ・Ⅱ類とも5%以下と未だ少ないが、一定量存在する。壺は、精製は散見的だが、粗製が単純な口縁壺Ⅲ類が5%以下だが存在する。注口土器はⅠ期に続き受け部をもたないⅠ類が全体に多い。

全体としては、両遺跡とも、概ねⅠ期と同様の器種構成や組成比率ながら、晩期の鉢・浅鉢・壺などの器種が増加し、多様な器種構成が認められる傾向が窺える。一部器種（深鉢・鉢、壺）の器形や組成比率には、両遺跡でやや相違があり、下叶水が全体に後期主体、宮の前が晩期前葉を主体にするなど時期的な違いによるのであろう。

Ⅲ期：同晩期中葉（大洞C1～C2）

層位的に宮の前3次中層を参照する。器種では深鉢が未だ30%弱と組成中で最も多いが、精製品は約10%以下に減少し、粗製が20%に増加する。鉢は約20%で、Ⅱ期と同じ精製品が16%と多い。深鉢と鉢で全体の50%（約1/2）と他器種増加に伴う減少傾向がある。

浅鉢はⅡ期で一定量確認され、当期で約20%と鉢と同等の組成比率に増加し、大半が精製品である。壺も20%弱に増加し、当該期に鉢・浅鉢と同程度の比率になり、精製（8%）と粗製（11%）は半々である。注口土器は、やや比率がⅡ期から減少し、5%前後になる。小型土器も5%以下に減るが、当該期も存続する。

器形では、深鉢Ⅰ類がほぼ無くなり、精製ではⅡ・Ⅲ類が5%前後で拮抗するが、粗製ではⅡ類が20%前後と大半を占め、Ⅲ類は2%と少なく、差異がある。鉢では、精製Ⅱ類（7.2%）、Ⅲ類（9.6%）とややⅢ類が多い。粗製はⅡ類（4%）のみである。浅鉢は、精製では口～体部が緩やかに湾曲するⅠ類（13%）、体部直線的なⅡ類（6.4%）でⅠ類が多い。粗製もⅡ類が僅かにある。壺は、精製は広口Ⅰ類（13.6%）、細口Ⅱ類（1.6%）でⅠ類が多い。粗製では単純な素口縁Ⅲ類（10%）が大半である。注口土器では、当該期にⅠ類（1.6%）とⅡ類（3.2%）が逆転し、受け口が増加する。

全体には、Ⅱ期の晩期前葉的な様相（宮の前3次下層）を引き継ぐが、器種では精製の鉢・浅鉢・壺・粗製深鉢の増加、精製深鉢・注口土器の減少がある。器形では、深鉢・鉢類でⅡ・Ⅲ類の定量化が特徴として上げられる。

Ⅳ期：晩期中葉～後葉（大洞C2～A）

Ⅲ期の流れから宮の前3次上層（大洞C2～A）を中心に、下叶水上層（大洞C1～A）、作野3次（大洞C2）を補完し、釜淵C（大洞C1～A）を参考にする。

器種では、深鉢が未だ35%（作野3次31%・下叶水31%）と組成の中で最も多く、Ⅲ期に継続して、精製品は15%前後（作野3次7%・下叶水2%）、粗製が20%前後（作野3次25%・下叶水28%）と粗製深鉢が全体に多い。鉢もⅢ期と同じく主体を占め約25%（作野3次22%・下叶水31%）あり、精製品約20%（作野3次16%・下叶水30%）と多い。深鉢と鉢類では60%（作野3次53%・下叶水62%）と全体の1/2以上を占める。浅鉢もⅢ期と同じく14%（作野3次24%・下叶水16%）と一定量確認され、大半が精製

第15図 縄文時代終末～弥生時代初頭遺跡の土器組成

[illegible]

* 下木で造られた後衛部・小間・土器を器形分類するが、本稿では断片未満から発生初期まであることから後期にまとめた。抽出土器は土器製作専事か宮の前174以上、他は174以上（但し生石は寄土器）。
 * 深鉢形類は生石2以上から発生する時期中に周上層から認められるもの（南文資料4）。浅鉢形類は作野次土540や生石2でみられる底部下面で口縁部が大きく反外するもの（作野次土540の浅鉢・E類）。
 * ※金細工・区は一定の時期相類があるが、一括性が判断され良好な資料がない（黒坂研究所のこの教示により）、本稿では、法量分布や形能などは比較を行った。
 * 生石の釈文資料・A8は、詳細は別編に譲るが、器形から深鉢類とし、変形工字文や多重の平行波線（平平行波線に別文点）は有文とし、精製品、それ以外を粗製とした。

品で12%（作野3次23%・下叶水12%）である。壺もⅢ期と同じく20%弱（作野3次13%・下叶水8%）あり、精製・粗製は12%・7%（作野3次8%・5%・下叶水7%・2%）と精製が若干多い。注口土器もⅢ期と同じく5%前後（作野3次5%・下叶水3%）と少ないが、一定量確認される。小型土器も数量は5%以下（作野3次5%・下叶水2%）だが当該期も存続する。

器形では、深鉢が精製でⅡ類（1.6%。作野3次0.5%・下叶水1.6%）が減少し、Ⅲ類（14%。作野3次7%・下叶水0%）が増加と一部遺跡で減少傾向にある。粗製はⅢ期と同じくⅡ類（14%。作野3次8.5%・下叶水18%）が多いが、精製と同じくⅢ類（5.6%。作野3次11%・下叶水3.3%）も増加し、遺跡で差がある。

鉢では、精製Ⅱ類（3.2%。作野3次0%・下叶水21.3%）が全体に少なく、Ⅲ類（16.8%。作野3次4%・下叶水8.2%）が多くなり、粗製にもⅢ類（4.0%。作野3次3.7%・下叶水0%）が散見される。

浅鉢では、精製がⅢ期と同じくⅠ類（9.6%。作野3次9%・下叶水3%）、Ⅱ類（2.4%。作野3次9.5%・下叶水9.8%）と類似した比率である。粗製はⅡ類（2.4%。作野3次0.5%・下叶水0%）が僅かにある。

壺も精製の組成の比率は、Ⅲ期を踏襲し、精製はⅠ類（8.8%。作野3次5.1%・下叶水4.9%）、Ⅱ類（3.2%。作野3次0.5%・下叶水0%）の順で多い。粗製もⅢ類（7.2%。作野3次1.5%・下叶水1.6%）が全体的に多い。

注口土器も、Ⅲ期と同じくⅠ類（0.8%。作野3次0%・下叶水1.6%）とⅡ類（2.4%。作野3次3.5%・下叶水1.6%）で後者の受け口を持つものが多い。

全体としては、前Ⅲ期：晩期中葉の様相と同様の器種・組成だが、器種では精製の深鉢・鉢類の増加、器形では深鉢・鉢類でのⅢ類の増加など、他遺跡でも共通の状況が看取される。なお、深鉢や鉢類の形態などは、最上川中流域遺跡（宮の前・作野）と、荒川流域遺跡（下叶水）でやや様相が異なる部分も認められる。

V期：晩期後葉～弥生時代初頭（大洞A'～青木畑）

Ⅳ期の後続資料は、数少ないが、大きな器種構成の検討上、作野2次ST40（1/6以上残存率の土器。以下、作野ST40と省略）を主に、生石2遺跡－C区（以下、生石と省略）の完形土器群を補完とする。

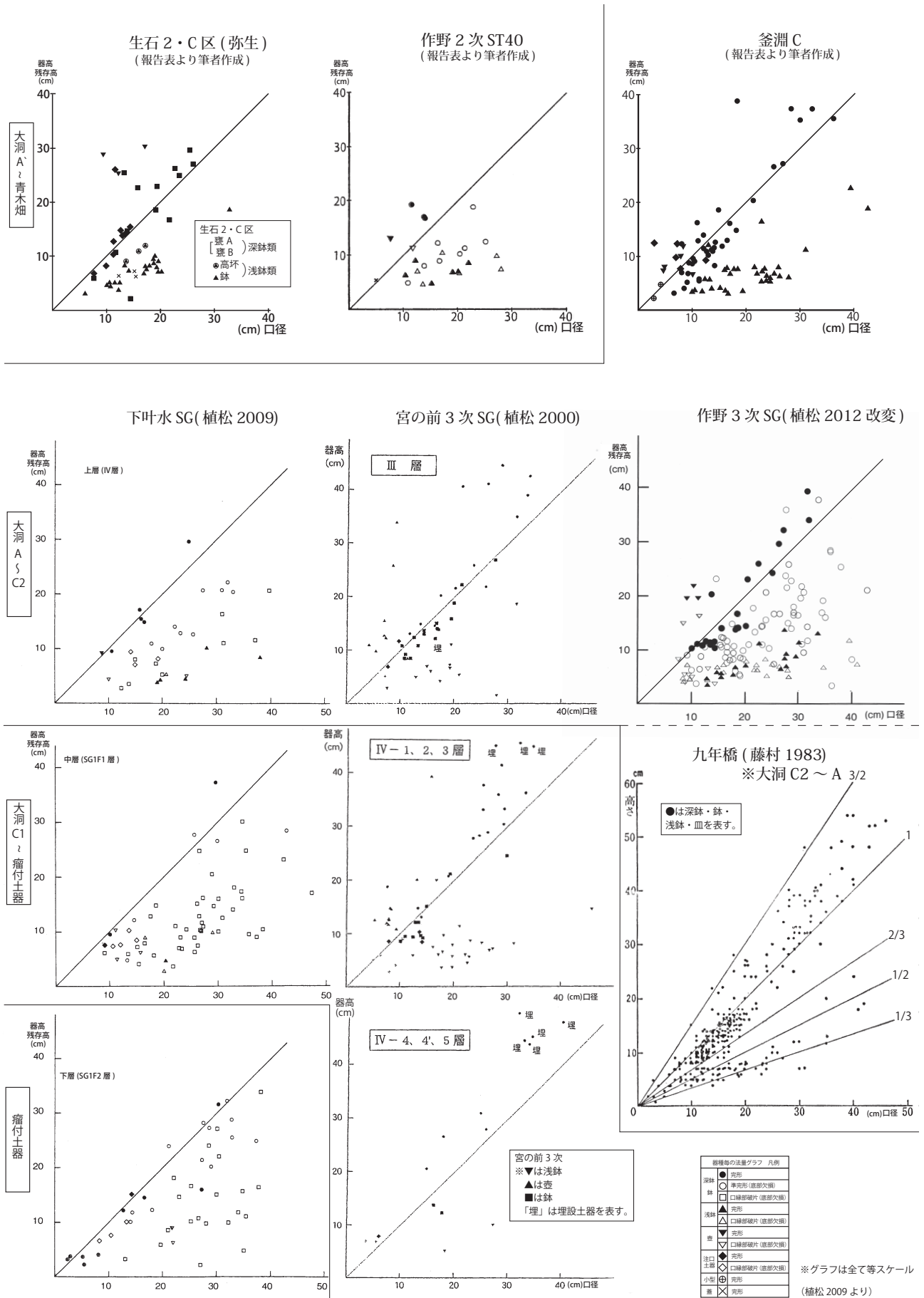
器種では、深鉢（生石報文の甕A・B含む）と浅鉢（生

石報文の鉢・高坏含む）が多い。深鉢は、Ⅳ期から継続して未だ39%（生石41%）と組成の中で2番目に高く、作野2次ST40も生石と同等の組成比率を示す。但し、作野ST40の精製品は、Ⅳ期と同じく5%前後（生石24%）と更に減少し、粗製が33%（生石18%）と増加するが、時期的に同時期～後出の生石では精製と粗製品が同等か精製（有文）の方が比率が高い傾向にある。Ⅳ期まで一定量あった口径と器高が同じ口縁部屈曲Ⅲ類の鉢類などは急減し、法量や器形などから上記深鉢形態に変容したものと考えられる。

浅鉢（鉢状や台付浅鉢も含む）は、Ⅳ期より増加し、44%（生石45%）と最も数が多くなる。精製品が大半で、Ⅳ期の鉢や浅鉢に見られた精製品が多い点を踏襲したものと考えられる。壺もⅣ期と同じく13%（生石6%）と一定量あるが、概ね減少傾向にある。なお、作野ST40の器形が不明な点もあるが、全体に無文ミガキなどの精製5%（生石5.9%）と縄文地文の粗製7.7%（生石0%）があり、Ⅳ期と同様に作野ST40段階では壺にも精・粗があるが、後出の生石段階では前者が多くなるようである。他に生石では弥生時代特有の大型壺や遠賀川系壺も認められるが、完形品の復元率からは実際個体数としてはあまり多くない可能性もある。壺に付随する蓋も5%（生石6%）ながら当期では明確に存在し、弥生時代的な遺物として注目される。なお、作野ST40にはないが、生石の浅鉢形の小型品を小型土器とした。Ⅰ期から継続して散見される縄文的な遺物かもしれない。

器形では、深鉢（生石報文の甕A・B含む）の精製品Ⅱ類がほぼ消失し、Ⅲ類2.6%（生石17.6%）となり、作野ST40では変形工字文など有文のものは非常に少ないが、生石では変形工字文など有文の急増が確認され、主要な組成の一つとなる。他に生石段階で、寸胴で胴部上半が膨らみを持つⅣ類が5.9%程だが出現し一定量認められる。粗製でもⅣ期と比べⅡ類2.6%（生石3.9%）が減少し、Ⅲ類25.6%（生石11.8%）が急増する。

浅鉢（生石報文の鉢・高坏含む）では、精製がⅠ類10.3%（生石37.3%）、Ⅱ類2.6%（生石5.9%）Ⅲ類の口縁部屈曲7.7%（生石2%）、当期から出現するⅣ類の底部丸底で口縁部が強く外反するもの17.9%（生石0%）となっており、作野ST40の方が全体にバラエティに富む器形構成となっている。一方、生石は完形資料は



第 16 図 各遺跡の土器法量図

第17図 各遺跡の土器地文組成表

土器拾得集中域出土の個体土器地文組成																	擦糸文		櫛歯状	へら描	条痕文	無文	文様有他	合計
遺跡	地区・層位等	斜縄文												直前段 多条/付 加条*	絡条体 条痕									
		LR	結節 LR	縦位 LR	RL	縦位 RL	L	結節L	R	LR・ RL	RLR	LR・ L(RRR)												
生石	C区(参考)	20		3	6	1													2	19	51			
	:青木畑	39%		6%	12%	2%													4%	37%	100%			
作野	2次ST40(参考)	28		1		1												1	1	8	40			
	:大洞A~青木畑	70%		3%		3%												3%	3%	20%	100%			
作野	F1	19	1							2			2	1		1			0	7	33			
	:大洞C2新~A	58%	3%							6%			6%	3%		3%			0%	21%	100%			
3次SG	F2・F3計	37	1		3		2		1	9			2	1					2	20	78			
	:大洞C2新	47%	1%		4%		3%		1%	12%			3%	1%					3%	26%	100%			
	F3下・F4計	33	2		9		1			9			2		1				8	1	66			
	:大洞C2古	50%	3%		14%		2%			14%			3%		2%				12%	2%	100%			
宮の前	Ⅲ層	52	3		5		22	1	4	5	1	1			6				25		125			
	:大洞C2~A	42%	2%		4%		18%	1%	3%	4%	1%	1%			5%				20%		100%			
3次SG	Ⅳ-1~3	48	13		7		2	5		22			3						25		125			
	:大洞C1~C2	38%	10%		6%		2%	4%		18%			2%						20%		100%			
	Ⅳ-4~5	12	8		1		3		1	3									8		36			
	:瘤~大洞C1	33%	22%		3%		8%		3%	8%									22%		100%			
下葉水	上層(Ⅳ・Ⅳ')	24	7		1		1			1			1		2				9	15	61			
	:大洞C1~A	39%	11%		2%		2%			2%			2%		3%				15%	25%	100%			
5~7ブツク	中層(SG1F1)	42	6		2		5		1				4		4	2			20	18	104			
	:瘤Ⅳ~大洞C1	40%	6%		2%		5%		1%				4%		4%	2%			19%	17%	100%			
	下層(SG1F2)	30			5		2			2					1	2	1		24	13	80			
	:瘤Ⅰ~Ⅲ	38%			6%		3%			3%					1%	3%	1%		30%	16%	100%			

*直前段多条と付加条は、数が少量などからまとめた。

第18図 各遺跡の土器赤彩組成表

赤彩	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
生石2	青木畑	7		17					2	26	51
	C区V期	26.9	0.0	65.4	0.0	0.0	0.0	0.0	7.7	51.0	
作野2次ST40	青木畑~A'			6					6	39	
	V期	0.0	0.0	15.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15	
宮の前3Ⅲ	A~C2			3					3	125	
	Ⅳ期	0.0	0.0	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	
宮の前3Ⅳ1~3	C2~C1			1	4	1		1	7	125	
	Ⅲ期	0.0	0.0	0.8	3.2	0.8	0.0	0.8	0.0	5.6	
宮の前3Ⅳ4~5	C1~瘤								0	61	
	Ⅱ期	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
赤彩	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
作野3次	A~C1			1	1					2	61
	Ⅳ期	0.0	0.0	3.8	3.8	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3	
下葉水	C1~瘤Ⅲ					1				1	105
	Ⅱ期	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.0	0.0	3.8	
下葉水	瘤Ⅲ~瘤Ⅰ							1		1	85
	Ⅰ期	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	3.8	

*本稿では、縄文時代から弥生時代にかけての変遷をみるため、生石2報告書中の壺ABは深鉢、鉢高坏は浅鉢として器種分類した。

第19図 各遺跡の土器補修孔組成表

補修孔	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
生石2	青木畑									0	51
	C区V期	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
作野2次ST40	青木畑~A'			1						1	39
	V期	0.0	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.6	
宮の前3Ⅲ	A~C2	8	1	1						10	125
	Ⅳ期	6.4	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.0	
宮の前3Ⅳ1~3	C2~C1	1		1						2	125
	Ⅲ期	0.8	0.0	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.6	
宮の前3Ⅳ4~5	C1~瘤	2		1						3	61
	Ⅱ期	3.3	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.9	
補修孔	時期	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	香炉	小型	蓋	計	総数
作野3次	A~C1	1	1	1		1				4	61
	Ⅳ期	1.6	1.6	1.6	0.0	1.6	0.0	0.0	0.0	6.6	
下葉水	C1~瘤Ⅲ	7	1							8	105
	Ⅱ期	6.7	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.6	
下葉水	瘤Ⅲ~瘤Ⅰ	6								6	85
	Ⅰ期	7.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	7.1	

*本稿では、縄文時代から弥生時代にかけての変遷をみるため、生石2報告書中の壺ABは深鉢、鉢高坏は浅鉢として器種分類した。

I類が圧倒的に多く、他はIV類の破片資料も含めて一定量確認できるだけである。壺は、精製でⅢ類2.6%（生石3.9%）と一定量あるが、IV期の有文のものは少なく、ミガキによる無文が主である。蓋は、笠状I類2.6%（生石2.0%）、取手付Ⅱ類2.6%（生石3.9%）と作野では半々だったものが、生石ではⅡ類がやや増加傾向にある。

全体として、作野ST40・生石の両遺跡とも器種組成などで類似した比率を示しており、組成からIV期までとは異なる様相が看取される。一方で新たな深鉢IV期の出現や器形の組成比率からは、両遺跡の相違も推測され、前述土器編年で示した通り、IV期→作野ST40→生石の変遷により、縄文時代から弥生時代に移行する時期の組成変遷が窺える。未だIV期の縄文的な精粗・器形組成などを残す作野ST40と、後出でより弥生時代的な生石の土器組成の状況が推測される。

A-2 土器 法量分布・赤彩・補修孔・地文施文

土器に関連する法量分布等についても概括し、前章I～V期の中での変遷や特徴を検討する。

法量分布(第16図) 土器の器種毎の法量分布は、深鉢・鉢がI～Ⅱ期では完形品が少なく不明な点が多いが、粗製深鉢は一定量ある。Ⅲ期では、宮の前IV-3層上面の埋設土器が深鉢全体の中で大形品が多く、一般的な粗製深鉢とは異なる可能性がある。詳細は別稿に譲るが、IV期にあたる新庄盆地の釜淵C遺跡C区では、包含層から完形土器144点が集中して出土しており、口径に比

して長大な器高の寸胴形の深鉢から地域性の一端が窺える。V期の深鉢は法量的にはIV期の鉢類と同等の法量のものが多い。なお数量の多いIV期の鉢は、口径と器高比がほぼ同じものが多く（約20cm前後）、口縁部A突起や平行沈線文等文様も含め、同一の規格（指向）の中で量産されたのかもしれない。

浅鉢では、Ⅲ期の精製C1浅鉢（宮の前報文52図-10）が文様や法量なども含め同じものがあるが、他遺跡でも出土しており関連が注目される。Ⅲ期段階で一部大型化が認められる。壺では、Ⅲ期で大型の精製壺（宮の前IV-1層）が存在する。それ以前では大型壺は明確でなく、当期から壺の大型化が始まったものと推測される。V期弥生時代初頭は、北陸や東南北部を中心に特殊大型壺が分布するが、これらの祖形も当期あたりの在地壺に由来しないだろうか。この大型化は注口土器でも見られ、概ねⅡ期の大洞BC式期（下叶水）にあたる。

赤彩(第18図) 赤彩された土器は、精製土器に多いが、粗製とした土器にも赤彩される場合がある。I期～Ⅱ期では、小型土器と注口土器で1点赤彩されるのみで、全体に占める赤彩率は1%台である。Ⅲ期に入りI期の器種以外に浅鉢や壺への赤彩が多くなり、赤彩率は5%前後に増加する。IV期も同等の比率を保つが、浅鉢や壺などに器種が限定的になる。V期には古相の作野ST40では浅鉢に限定され15%程に赤彩率が増加し、新相の生石では同じ浅鉢（報文では鉢・高坏）、深鉢、蓋など

第20図 各遺跡の石器器種組成表

	下叶水 癪付前～大洞A I・Ⅱ期主体			宮の前3次 癪付～大洞A Ⅱ～Ⅳ期主体			宮の前2次 癪付～大洞A Ⅱ～Ⅳ期主体			作野3次 大洞C2～A Ⅳ期主体			作野1次 大洞C2～A Ⅳ期主体			釜淵C-C区 大洞C1～A Ⅳ期主体			作野2次ST40 大洞A'～青木畑 Ⅴ期主体			生石2 青木畑 Ⅴ期主体		
種別	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)	点数	率(%)	率(%)
石鏃	169	6.5	15.8	203	16.9	29.1	145	26.9	38.5	26	24.3	37.7	6	7.9	13.6	247	16.5	25.1	5	22.7	31.3	21	42.9	80.8
石槍	116	4.5	10.9	17	1.4	2.4	30	5.6	8.0	11	10.3	15.9				8	0.5	0.8	5	22.7	31.3			
石鏃	121	4.6	11.3	120	10.0	17.2	38	7.0	10.1	15	14.0	21.7	10	13.2	22.7	416	27.8	42.3	1	4.5	6.3			
石匙	176	6.8	16.5	122	10.1	17.5	102	18.9	27.1	6	5.6	8.7	25	32.9	56.8	242	16.1	24.6				5	10.2	19.2
石篋	487	18.7	45.6	235	19.5	33.7	62	11.5	16.4	11	10.3	15.9	3	3.9	6.8	71	4.7	7.2	5	22.7	31.3			
搔器	225	8.6		75	6.2		6	1.1		2	1.9		10	13.2		加工痕に 含まれる						22	44.9	
削器	329	12.6		109	9.1					9	8.4								1	4.5				
異形石器	2	0.1		3	0.2											3	0.2							
加工痕	1479			302						20						3000			8					
打製石斧	89	3.4		11	0.9								1	1.3		11	0.7							
磨製石斧	170	6.5		69	5.7		43	8.0		9	8.4		12	15.8		90	6.0					1	2.0	
凹石	253	9.7		81	6.7		62	11.5		8	7.5		3	3.9		111	7.4		2	9.1				
磨石	321	12.3		114	9.5		50	9.3		3	2.8		2	2.6		7	0.5		1	4.5				
敲石	104	4.0		27	2.2					5	4.7					277	18.5							
石皿	27	1.0		7	0.6		1	0.2		1	0.9		2	2.6		4	0.3		1	4.5				
砥石	4	0.2		8	0.7					1	0.9					1	0.1		1	4.5				
石鏟	10	0.4		2	0.2		1	0.2								11	0.7							
石碗													2	2.6										
計	4082			1505			540			127			76			4499			30			49		
加工痕除く計	2603	100.0		1203	100.0		540	100.0		107	100.0		76	100.0		1499	100.0		22	100.0		49	100.0	
定形石器計	1069		100.0	697		100.0	377		100.0	69		100.0	44		100.0	984		100.0	16		100.0	26		100.0
石核				132									4			527								
原石				42																				

* 不定形石器は、報告書で器種判然とせず、搔器、削器とした。宮の前・作野・釜淵Cでは石核を加えた。

器種	石鏡	石楯	石鏃	石匙	石鏃	揺器	削器	異形石器	加工痕	不定形石器	小計(A)	合計A+B=C	小計(B)	磨製石斧	* 給刃	含む
石材／遺跡	宮3 下	作3 作2 生	宮3 下	作3 作2 生	宮3 下	作3 作2 生	宮3 下	作3 作2 生	宮3 下	作3 作2 生	宮3 下	作3 作2 生	宮3 下	作3 作2 生	宮3 下	作3 作2 生
堆積岩																
珪質頁岩	80			6 60		49		39		39		26	31		371	372
黒色珪質頁岩	5				5		6		6		2	1		25	25	0
黒色頁岩	17	12		15		20	14		10	23		41	70		668	671
黄色頁岩		13		11		4		6		28		6	7		127	127
緑色頁岩				4									1		5	5
頁岩	36	61	19	3	17	11	6	4	42	83	12	1	64	122	6	5
緑泥岩	4				4			1				2		2		2
粘板岩															1	61
砂岩															1	92
硬砂岩	1									2			1		4	4
礫岩															1	6
泥岩		1		1		2		1		14		1	8		31	56
凝灰岩								1							2	105
シルト岩															0	24
石灰岩															0	1
緑色凝灰岩					1			1							8	19
小計	143	87	19	3	21	17	91	7	4	116	104	12	1	119	154	6
火成岩																
流紋岩	2	6			7		4		11		22		2		6	
石英粗面岩																
安山岩										2				4		5
鉄平石																
玄武岩																
花崗岩																
閃緑岩		1														
角閃岩																
小計	2	7	0	0	0	0	7	0	0	0	4	0	0	0	11	0
変成岩																
花崗片麻岩																
片麻岩																
片岩																
黒色片岩																
緑泥片岩																
石墨片岩																
千枚岩																
蛇紋岩																
ホルンヘルス																
小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岩脈状火成岩																
玉髄	24	17	2	1		2	2	1	1	2		4	2	1	2	1
鉄石英	19	13		1		4	1	1	2		1	4		3	1	1
珪岩	3	11				3	1		2		2		2		2	
瑪瑙	7	33	5			9	1	11		7		1	10		1	1
石英	1							1								
黒曜石	1	1														
翡翠		0														
碧玉	3							1								
小計	58	75	7	2	0	0	18	4	1	4	13	3	0	3	11	0
合計	203	169	26	5	21	17	116	11	5	120	121	15	1	122	176	6
アスファルト付	40	12	2	2			1	3		21	29	3		1		1
比率(%)	20	7	8	40			20	2		17	16	50		9		1

* 遺跡名は、宮3:宮の前遺跡3次、下:下叶水遺跡、作3:作野遺跡3次、作2:作野遺跡2次ST40出土資料、生:生石2遺跡を表す。釜淵遺跡は、個別の石材が不明なため除外した。

* 器種組成を主とし、宮の前遺跡などの石核・原石は除外した。外した。宮の前・下叶水では頁岩を細分したが、作野2・3次では頁岩としてまとめた。

* 三脚石は三脚石器、冠・鋸は石冠・石鋸を表す。

打製石斧				磨石				凹石				敲石				石皿				砥石				石鏝				石棒				石刀				石刻				独鈷石		冠・鋸		岩板・線刻碑		三脚石		垂飾品		石製品		勾玉他		円盤状		石製品		器種	
宮3	下	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	宮3	下	作3	作2	遺跡													
																																									1					珪質頁岩													
																																												黒色珪質頁岩															
	3																																											黒色頁岩															
																																												黄色頁岩															
																																												緑色頁岩															
8	57	1	1																																											頁岩													
																																												緑泥岩															
																																												粘板岩															
1		4	17			7	13	2			4		1	6	1		5	4	1	1			1	2		1		1		5	1		4	3	4			1	1					砂岩															
																																												硬砂岩															
		1				1						1					2																												礫岩														
	14		4				1		1		1														1																				泥岩														
		2	40			3	18				4	1		2							1	10		1		1				4		2		7	2			3	1					凝灰岩															
				2			9	2								1																1	1		2	2	3			1					シルト岩														
																																1													石灰岩														
	1				1		1	1	1			4																							1		1							緑色凝灰岩															
9	75	8	62	2	1	11	42	5	2	0	9	5	2	8	1	0	8	4	1	1	1	10	1	20	16	26	2	1	0	6	7	1	12	6	17	3	0	3	4	2	0				小計														
	5					1	4				1													1		1									1				35						流紋岩														
		2				7																																						石英粗面岩															
2	3	102	31	1		62	22	3		27	18		5	15		1					1			1	1	1			1	1									153	5	1	1			安山岩														
																																			3									鉄平石															
	1		5				3				3																																		玄武岩														
		1	199				177				71		4																								1								花崗岩														
	4	1	3				5																	2																			2			閃緑岩													
	1																																														角閃岩												
2	14	106	238	1	0	70	211	3	0	27	93	0	5	19	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	2	3	2	0	0	0	1	1	0	0	0	3	0	2	0	0	188	7	1	1			小計												
																																															花崗片麻岩												
																																															片麻岩												
			19								2																		1																	片岩													
																								31																						黒色片岩													
																																															緑泥片岩												
																																															石墨片岩												
																																															千枚岩												
																																															蛇紋岩												
																																															ホルンヘルス												
0	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	63	8	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	小計													
																																															玉髓												
			2																																											鉄石英													
																																															珪岩												
																																															瑪瑙												
																																															石英												
																																															黒曜石												
																																															翡翠												
																																															碧玉												
0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	1	0	2	0	0	0			小計													
11	89	114	321	3	1	81	253	8	2	27	104	5	7	27	1	1	8	4	1	1	2	10	1	85	27	28	2	1	2	7	7	1	15	8	21	4	0	193	11	3	1					合計													
																																															アスファルト比率 (%)												

第 21 図 石器石材組成

に器種が増え、赤彩率は50%以上に増加する。

補修孔（第19図） 土器の補修孔は、赤彩土器と共に、土器の精粗（再利用される土器の意味）などを検討する上で重要な要素となろう。Ⅰ期～Ⅱ期では、後期深鉢に補修孔があるものが大半（下叶水では精製と粗製でほぼ半々）で、全体に占める比率は、5～7%台にのぼる。

Ⅲ期に入り、比率はやや下がる傾向にある。Ⅳ期では遺跡によって6～8%とばらつきがあるが、深鉢・鉢・浅鉢に一定量は認められる。Ⅴ期には3%以下（古相の作野ST40で2.5%・新相の生石で0%）になり、器種も浅鉢（報文では鉢・高坏）などに限定される。縄文後晩期に補修率が一定量あり（10%以下）、弥生時代に入ると少なくなる傾向がある。

地文（第17図） 各期の地文組成なども特徴を記す。Ⅰ期には、斜縄文LRが30～40%台と最も多く、次の無文が20%台と、以後Ⅳ期まで普遍的にこれらの比率が高く続く。他に結節LR、RL、I、LR・RL（羽状）などが5～10%前後、その他特殊な縄文は3%以下で、櫛歯状文などへう描文もⅠ・Ⅱ期には一定量散見され、全体に多様な縄文施文がみられる。

Ⅳ期には、LRの比率が40%以上に増加し、遺跡に

よって結節LR（下叶水）、I（宮の前）、LR・RL羽状（作野）などが10%以上になるものがあるが、遺跡差や地域差が判然としない。その他特殊な縄文は3%以下である。全体にLRや幾つかの縄文施文に種類が集約されていくようである。Ⅴ期には、古相の作野ST40でLRが70%まで増加し、条痕文など当期特有の施文も認められる。新相の生石では再びLRが全体の約40%まで下がるが、無文化も約40%まで増加する。RL12%や縦位LR施文6%などに地文が集約化される。

B 石器—器種・石材（第20・21図）

石器は、各層位毎では数量が限られるため、各遺跡単位で組成を試みた。時期は遺跡毎の主体的な時期をあて、特に本節では縄文時代に特有の定形化した剥片石器の概略的な変遷を古い順に整理する。

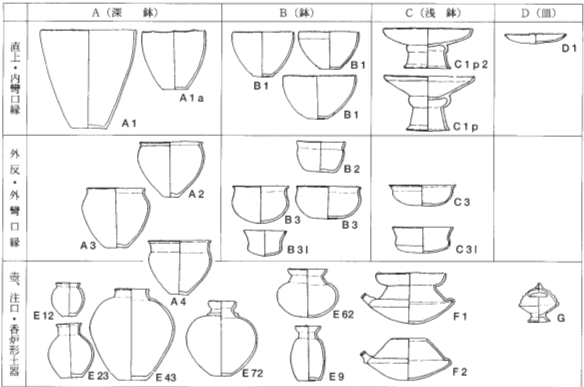
石器器種（第20図） 器種では、縄文時代に特有の定形化した剥片石器の中で、下叶水（Ⅰ・Ⅱ期主体）では、石鏃が16%と一定量あり、これは以後全遺跡を通し狩猟具として一定量認められる。他に石匙17%、石筥46%と多く、当期の主体的石器と考えられる。宮の前（Ⅱ～Ⅳ期主体）は、下叶水と同じ器種組成の高い比率を示すが、石鏃・石匙は20%台に増加、石筥は25%

遺跡	時期 (大淵)	深鉢・鉢					浅鉢			壺	注口	その他	個体数
		深鉢	台付深鉢	鉢	台付鉢	計	浅鉢	台付浅鉢	計				
是川①	B～A'	7.2	5.0	13.1	9.4	29.8	9.2	4.3	13.5	34.2	19.1	3.4	997
	B～A'	2.7		10.5	8.4	26.5	19.0	1.5	20.4	34.0	17.4	1.7	1,693
亀ヶ岡	C ₁ ～C ₂	2.1		37.5	6.3	45.8	18.8		18.8	35.4			48
土井1号	BC～A	8.5	9.3		3.3	21.6	12.3	0.3	12.6	54.4	7.7	4.4	366
石郷	B	3.0		12.1	11.1	26.3	7.0	4.0	11.1	37.4	22.2	3.0	99
九年橋	C ₂ ～A	4.7		37.0	8.0	49.8	11.8	3.0	14.8	32.3	3.0		297
ドゥマ ンチャ	B	70.8		19.8		90.6	1.8		1.8	7.1	0.5		561
	A	81.0		14.3		95.2	3.2		3.2	1.6			63
宇鉄	C ₁ ～C ₂	68.7			17.4	86.1	5.5	0.1	5.7	7.7	0.4	0.1	793
亀ヶ岡	C ₁ ～C ₂	32.3		41.0	1.7	75.0	10.8		10.8	13.9	0.3		238
山王	C ₂	71.3				71.3	13.0		13.0	14.8	0.9		216
	A'	48.0		27.0		74.9	12.0		12.0	13.0			382
館	BC	62.8		9.3		72.0	5.3	7.6	13.0	6.2	8.0	0.8	486
	C ₁	52.3		10.0		62.3	7.7	9.2	16.9	16.9	3.8		130
	C ₂	52.3		11.9		64.2	17.3	4.1	21.4	11.9	2.1	0.4	243
	A'	53.4		10.1		63.5	2.8	12.4	15.2	20.8		0.6	178
沢上	B	82.9				82.9	9.2		9.2	3.9	3.9		76
二月田	B	92.9				92.9	1.7	1.7	3.4	2.8	0.9		466
寺脇	C ₂	62.1		24.7	0.5	87.4	7.4		7.4	4.9	0.3		364

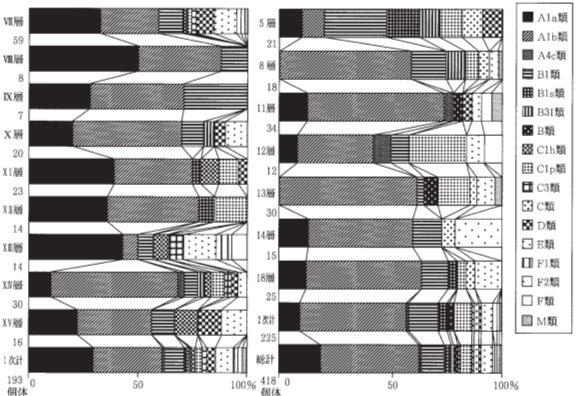
第22図 東北地方各遺跡の組成比率（藤村1983）

資料	深鉢	鉢	浅鉢	壺	注口	その他	計
完形資料	4 (4.7)	134 (45.1)	44 (14.8)	96 (32.3)	9 (3.0)		297
復元資料	132 (19.9)	180 (27.2)	123 (18.6)	205 (31.0)	17 (2.6)	7 (1.1)	662
合計	146 (15.2)	314 (32.7)	167 (17.4)	301 (31.4)	26 (2.7)	7 (0.7)	959

第23図 岩手県九年橋遺跡の組成比率（藤村1983）



中沢目貝塚Ⅱ群土器の器種類型（アミ部分は装飾、文様帯）



第24図 宮城県中沢目貝塚層位別土器組成（須藤1995）

台に減少する。作野（Ⅳ期主体）は、石鏃が 28%・石筥 31% で宮の前と同等であり、石匙 70% と石錐 56% は増加傾向にある。植生や動物相など違いもあるが、後期から晩期後葉への石器組成の様相（石筥の減、石匙・石錐の増など）が遺跡や地域によってやや異なるようである。

作野 ST40（Ⅴ期主体）では、数量が少ないが、石鏃 31%、石槍 31%、石筥 31%、石錐 6% と器種が限定的になる。最も新相の生石では、石鏃 80%、石匙 19% と更に器種が集約化され、縄文時代に一般的な石筥ではなく、スクレイパー（報文）と称される不定形石器が石鏃と同等量で存在する。

石器石材（第 21 図） 石材は、剥片石器では、頁岩の堆積岩が主で、玉髓・鉄石英・瑪瑙など岩脈状火成岩も多い。礫石器では、流紋岩・安山岩、花崗岩などの火山岩、砂岩・泥岩・凝灰岩など堆積岩が多い傾向にある。

器種別には、剥片石器の石鏃・石槍・石錐などの小形の石器では、主体の頁岩の他に玉髓や鉄石英、瑪瑙製が多く、宮の前では原石の大きさに起因すると考えられる。他に下叶水では黄色頁岩が石鏃・石槍・石筥などに一定量認められる。頁岩が熱変性を受けた小国町近辺（荒川・朝日山系）特有の石材（田宮良二氏のご教示による）で、今後その分布範囲などが注目される。

6 まとめ

上記までに縄文時代終末～弥生時代初頭にかけての各遺跡の土器や石器の組成などの変遷を概観した。最後に前章までを整理し、まとめにかえる。

近年東北では、貝塚遺跡などを中心に遺物の組成比率などが研究されている（第 22～24 図）。特に岩手県九年橋遺跡をまとめられた藤村東男氏は、従来の土器組成比率を整理し、詳細な遺物組成論を展開する（藤村 1983）。その中で藤村氏の土器組成における留意点を要約すれば、①資料の取舍選択がないこと（優品など資料の偏りを防ぐ）、②多くの資料数の確保（数量的な信頼性）、③個体数の数え方の共通性（完形品と破片資料の同一個体性の有無など）、④土器分類の基準の共通性（器形・文様分類の差異による相違）があげられる。更にこれらを踏まえ組成率には、a 完形資料の組成比（堆積時の小破片を除く組成比率）、b 破片資料の組成比（使用

時の破損消耗を補充するために新規に供給された土器も含めた累積総量の組成比率）、c 完形資料と破片（復元）資料の援用（使用時の組成比率）の 3 種類があり、各々その組成の意味する性格が異なり、c が「考古学的には最も意味のある数値」とする（藤村 1983. 第 23 図）。

本稿では、前述①は、各遺跡の捨て場（各層位）や竪穴住居跡など一括性の高い資料を取り上げた。②はⅤ期の作野 ST40 や生石 2 を除き、各遺跡の遺物が出土する各層位の前後を補完して、藤村氏が指摘する安全な 100～200 点の確保に努めた。③は生石 2 を除き（生石 2 は土器形態を探るため完形資料のみで 51 点確保）、各遺跡（各層含む）の集中域の概ね 1 個体（残存率 1/6 以上 [宮の前のみ 1/4 以上] ）と判断できるものを抽出した。④は九年橋遺跡などと同様に器種を優先したが、時期的に九年橋遺跡（大洞 C 2～A 式）と異なり時期幅があるため、共通的分類として上位から器種→文様（精粗）→器形の順で分類した。

全体的な組成比率は、九年橋遺跡同様の「徹底した復元」作業などから、少なくとも下叶水・宮の前・作野 3 次・作野 ST40 資料は、藤村氏の c 完形資料と破片（復元）資料の援用（使用時の組成比率）を目指した。しかし、実際には土器捨て場の性格や、洪水層を含む堆積層のあり方、一部資料点数の少なさなどから、各遺跡の各層位が「使用時の組成比率」を直截に表しているか信頼性が乏しいものもあった。

そのため、本稿でまとめた全体的な資料では、前後の層の補完や、複数遺跡により資料数を確保することで、「少なくとも各期（時期幅がある場合も含む）での捨て場などに持ち込まれた（使用時の）個体数の組成比率」（植松 2007）を表すと判断し、県内当該期の遺物組成率の変化を大枠で知る上で有効な資料と考えた。

その結果、全体には、縄文時代の終末期のⅠ期（後期後葉：瘤付土器Ⅰ～Ⅲ期）に深鉢（精製Ⅰ、Ⅱ類・粗製Ⅱ類）や注口土器が主体だったものが、Ⅱ～Ⅲ期（後期末～晩期前半：瘤付土器Ⅲ～大洞 C 1 式期）に入り、精製品は深鉢（Ⅱ類）や鉢、浅鉢、壺などに広がり多様化・小型化（一部注口土器は大型化）する。同時期は粗製品も前述器種で若干は作られるが、特に粗製深鉢Ⅱ類は一定量が後晩期（Ⅰ～Ⅴ期古相 [作野 ST40 段階] ）を通じ存続し、埋設土器にも意識的に利用された。

Ⅳ期（晩期中～後葉：大洞C2～A式期）に入り、一部壺や浅鉢などは大型化し、器種の組成で鉢や浅鉢などの増加の偏りが見え始める。岩手県九年橋遺跡（大洞C2～A式期）と時期が重なる宮の前上層（同C2～A式期）・下叶水上層（同C1～A式期）・作野（同C2～A式期）の組成比率は、一部深鉢・壺などで異なるが、概ねほぼ同等の器種比率（深鉢・鉢の合計比は全体の約1/2を占める）で、当期の東北地方に通底した土器組成なのであろう。

V期（同晩期後葉～弥生時代初頭：大洞A'～青木畑式期）では、全体に浅鉢や深鉢、壺・蓋などに器種が集約され、古相の作野ST40ではⅣ期の縄文的な土器組成を残しつつ、石器組成では、それまでとやや異なる様相（器種の偏り・集約など）が看取される。新相の生石では更に集約化が進み、土器の新たな器形や赤彩比率、石器の器種組成などからもⅣ期までの系譜から大きく変容するあり方を示す。但し、土器地文では原体の集約化などはあるが、依然としてⅠ期以降に普遍的な原体（LR）を選択している。

上記から、Ⅰ～Ⅲ期は概ね縄文時代的組成変遷で、Ⅳ～V期の縄文時代最終末から弥生時代初めにかけては、縄文的な要素を残しつつ、段階的（土器器形[文様]・石器器種[大洞A式期]→土器器種[大洞A'式期]→縄文施文（青木畑式期）などの順）に、相互に相関関係を持ちながら、生活環境を変容させ、新たな稲作文化を受容していった当時の人々の様子が窺える。

最後に本稿を作成するにあたり、黒坂雅人、小林圭一、藤村東男、須藤隆、藤沼邦彦、秦昭繁、田宮良一、高柳健一、渡邊淑恵、山木巧、後藤枝里子氏には多大なご指導を得た。記して感謝申し上げる。

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1989 「瘤付土器様式」『縄文土器大観4』小学館
- 安孫子昭二 1982 「縄文時代後・晩期」『村山市史別巻1 原始古代編』村山市教育委員会
- 阿部明彦 1984 『作野遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会 83集
- 阿部明彦 1988 「蟹沢遺跡」『東根市史』
- 安部実 1987 『生石2 遺跡発掘調査報告書』山形県教育委員会 111集
- 植松暁彦 1999 『宮の前遺跡第3次調査報告書』山形県埋蔵文化財センター第65集
- 植松暁彦 2007 「村山市宮の前遺跡第3次調査の遺物組成」『北村山の歴史第9号』北村山地域史研究会
- 植松暁彦 2009 『下叶水遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター 177集

- 植松暁彦 2011 『作野遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター 194集
- 植松暁彦 2012 『作野遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター 205集
- 黒坂雅人 2000 『釜淵C 遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター 115集
- 高柳圭一 1988 「仙台湾周辺の縄文時代後期後葉から晩期初頭にかけての編年動向」『古代 85号』
- 小林圭一 2001 「最上川流域の縄文時代後・晩期の遺跡分布」『山形考古』第7巻第1号
- 小林圭一 2011 『亀ヶ岡式土器成立期の研究』早稲田大学先史考古学研究所
- 佐藤庄一 1984 「山形県における縄文時代後晩期の遺跡分布」『砂川A 遺跡発掘調査報告書』朝日村教育委員会
- 佐藤鎮雄他 1977 『主要地方道尾花沢寒河江線道路改良工事発掘調査報告書』山形県教育委員会第9集
- 佐藤禎宏・佐藤鎮雄 1972 『神矢田遺跡第3・4・5次発掘調査報告書と考察』遊佐町教育委員会
- 佐藤禎宏・佐藤鎮雄 1984 『砂川A 遺跡発掘調査報告書』朝日村教育委員会
- 佐藤嘉広 1992 「東北地方における遠賀川系土器の受容と製作」『加藤稔先生還暦記念東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 鈴木克彦 1983 「亀ヶ岡式土器」『縄文文化の研究4』雄山閣
- 須藤 隆 1995 『縄文時代晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究会
- 須藤 隆 1998 『東日本先史時代文化変化・社会変動の研究』算修社
- 高瀬克範 2004 『本州島東北部の弥生社会誌』六一書房
- 高橋龍三郎 1988 「亀ヶ岡式土器の文様について」『亀ヶ岡式土器の編年について』第3回縄文文化検討会
- 林 謙作 1981 「縄文晩期という時代」『縄文土器大成4』講談社
- 藤沼邦彦 1981 「東北地方」『縄文土器大成4』講談社
- 藤沼邦彦他 1986 『田柄貝塚Ⅰ』宮城県教育委員会
- 藤沼邦彦 1989 「亀ヶ岡式土器様式」『縄文土器大観4』小学館
- 藤村東男 1977 『九年橋遺跡調査報告書第3次～第6次合本』北上市教育委員会
- 藤村東男 1983 「縄文土器組成論」『縄文文化の研究5』雄山閣
- 藤村東男 1984 『縄文土器の知識Ⅱ』東京美術
- 森 幸彦 1988 『三貫地貝塚』福島県立博物館調査報告書 17集
- 山口博之 1994 『宮の前遺跡第2次調査報告書』山形県埋蔵文化財センター 19集
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号
- 山内清男 1932 「日本遠古の文化」『ドルメン』第1巻第6・7号
- 山内清男 1964 『日本原始美術1 縄文式土器』講談社
- 山内清男 1979 『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
- 柳沢和明ほか 1990 『摺萩遺跡』宮城県文化財調査報告書第132集